

古墳時代初期倣製鏡の一側面-重圏文鏡と珠文鏡-

メタデータ	言語: jpn 出版者: 明治大学史学地理学会 公開日: 2009-02-13 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小林, 三郎 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/1601

古墳時代初期倣製鏡の側面

—重圈文鏡と珠文鏡—

小林 三郎

一、緒言

古墳の副葬品の中で、主要な位置を占めるもの一つに銅鏡がある。古墳の副葬品は、時代とともにその主役が交代し、その主役はそれぞれの時代の社会的政治的背景を反映しているといわれる。古墳時代の初期には銅鏡が、前半期には武器・武具・装身具が、後半期には馬具・須恵器などがその主役として登場し、交代する。

本稿での中心は銅鏡であって、その中でもとくに古墳時代初期のものに焦点をあててみた。具体的には「重圈文鏡」をとりあげることにした。重圈文鏡は、いわゆる倣製鏡（中国鏡を模倣して製造したもの）であるが、初期古墳に顕著にみられる中国製三角縁神獸鏡や、他の中国鏡あるいは倣製三角縁神獸鏡などとはことなつた性質をみせている。とくに、弥代時代以来の倣製鏡との関連や、その後の倣製鏡へと連らなる位置を占めるものとして重要であると考えた。

重圈文鏡の出土例が、古墳時代の初期に集中的にみられるという現象は、古墳発生期の諸問題と多くかかわりをもっている。たとえば、副葬鏡の中心を中国鏡に依存している段階で、いち早く重圈文鏡という特殊な鏡式を生み出したのは、どのような原因にもとづくものなのか。また、重圈文鏡をふくめた一群の小形倣製鏡が、古墳や他の遺跡に埋められていった過程をどのように考えるのか、さらに各地にみられる「地方ちまたの古墳」の成立にいたる経過の中で、それらがどのような役割を果たしたのだろうか。

ここでは、まだ類例のとぼしい重圏文鏡の出土例を抽出し、重圏文鏡の系譜や後に連らなる一群の倣製鏡への可能性を求めていこうと思う。

二、重圏文鏡の出土例について

1 大分県大分市三芳字志手 亀の甲古墳⁽¹⁾

明治四五(一九一三)年五月に発掘された。円墳と考えられる古墳で、内部主体は組合箱式石棺である。副葬品として碧玉製管玉、ガラス小玉、刀、土器などがあり、中国製三角縁波文帯三神三獣鏡と重圏文鏡が知られている(第1図)。重圏文鏡は面径五・八センチメートルあって、素文縁、やや粗い外向鋸歯文・櫛歯文帯を経て三重の突線による円圏がめぐる。重圏と円鈕座との間に突線による鋸歯文がわずかにみとめられる。

2 福岡県粕屋郡粕屋町仲原 鬼の首古墳⁽²⁾

大正二(一九一三)年二月に発掘され、円墳に組合箱式石棺を内部主体とする。硬玉勾玉、碧玉管玉、刀子、滑石製紡錘車とともに面径七・五センチメートルの重圏文鏡一面が知られる(第2図)。素文縁、櫛歯文帯、突線による四重の円圏、円座鈕による鏡背文様が構成される。

3 福岡県福岡市南区大字老司字大谷 老司古墳⁽³⁾

昭和四〇(一九六五)年から四四(一九六九)年にかけて、予備調査を含めて前後五次にわたる調査がおこなわれた。古墳は丘陵上に占地する全長九〇メートルの前方後円墳で、葺石と埴輪列がある。後円部に三基(一、二、三号石室)と前方部に一基(四号石室)、合計四基の内部主体がみとめられた。内部主体の石室は、いずれも竪穴式石室の系統のもので、一、



第1図 大分・亀ノ甲
面径 5.8 cm



第2図 福岡、鬼の首
面径 7.5 cm

三、四号石室は石室短辺の一方に開口し、石室外に墓道と思われる施設をもつもので、横口式石室の様相を呈するものであるという。二号石室は墓道施設をもたない横口式石室といわれている。

重圏文鏡を出土した石室は第三号石室で、老司古墳の四石室の中では最も年代のさかのぼるものと推定されている。第三号石室は内法長三・二メートル、幅二・一メートル、深さ一・四メートルあって、竪穴式石室としてはやや矩形化した平面形を示している。副葬品は石室内の配列状態から二群にわけられ、二回の埋葬が推定されている。まず、石室東北隅を中心とする副葬品の一群で銅鏡六面、勾玉、管玉、環頭大刀、鉾、劍、鉄鏃、やりがんな、土器などがある。第二群は、石室の西南隅を中心とするもので、頭を南に向ける遺骸と金環、玉類、銅鏡二面、劍、刀、斧、鍬先、砥石、短甲、櫛などがある。

老司古墳の重圏文鏡は、第三号石室の東北隅を中心とする副葬品群にふくまれており、中国製三角縁神獸鏡片、内行花文鏡、方格規矩四神鏡、方格規矩文鏡二面が伴出している。また、第三号石室西南隅の副葬品群中には二面の内行花文鏡がふくまれている。

重圏文鏡は、面径七・九センチメートルで素文縁、櫛歯文帯、三重の円圏、素文帯をはさんで三重の円圏が再びめぐり円座をもつ鈕がある(第3図)。白銅質の鍔上りのよいもので、調査者は舶載鏡というが再考の要があるろう。

4 兵庫県尼崎市下坂部字溝平 溝平遺跡⁽⁴⁾

昭和三二(一九五七)年一月に発見された。遺跡は、弥生時代後期の包



第4図 兵庫・溝平
面径 3.8 cm



第3図 福岡・老司
面径 7.9 cm

含層と古墳時代に属する包含層とが重なっており、重圏文鏡は弥生時代後期の包含層から出土したといわれる。面径三・八センチメートルと小形のもので、素文縁、三重の円圏からなる(第4図)。溝平遺跡は、この調査の詳報に接していないが、弥生時代後期の包含層中の出土と伝えられているので、あるいは弥生時代最終末期から土師式土器への過渡的な時期に相当するものではないかとも考えられる。

5 大阪府枚方市高塚町 鷹塚山遺跡⁽⁵⁾

丘陵の突端近く、海拔六〇メートルほどの位置にある、いわゆる高地性集落遺跡であり、弥生時代後期終末の時期といわれている。

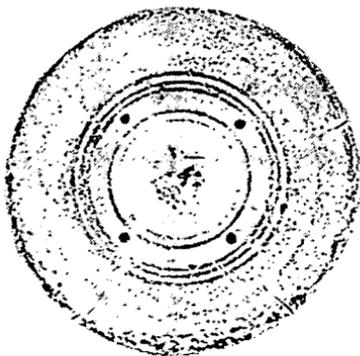
昭和四三(一九六八)年に調査され、分銅形土製品や異形土器、手あぶり形土器、有孔球状土製品などと共存関係を示す重圏文鏡がある。

重圏文鏡は、面径七センチメートルで、素文縁、斜行櫛歯文帯、二重の円圏、斜行櫛歯文帯を経て鈕にいたる(第5図)。

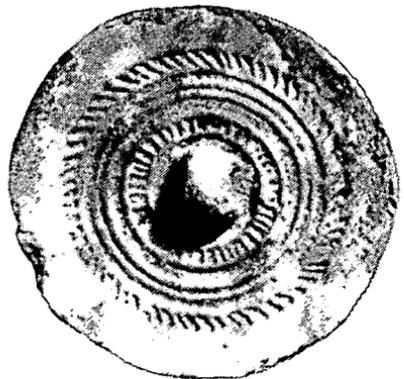
6 大阪府羽曳野市壺井 御旅山古墳⁽⁶⁾

丘陵上に立地する前方後円墳で、全長四四・五メートルあって、墳裾に葺石、埴輪をめぐらせている。埋葬主体は、もと粘土槌であったと考えられるが、すでに破壊されていて詳細は不明である。副葬品のうち銅鏡が二二面あったらしく、江戸時代にそれらが再埋納された。銅鏡は中国製三角縁獣文帯三神三獸鏡三面、唐草文帯三神三獸鏡一面のほか、倣製流雲文縁四神鏡一面、内行花文鏡(同范のもの三種七面をふくむ)一四面、珠文鏡一面、変形獣文鏡一面と重圏文鏡一面がある。

重圏文鏡は、面径六・八センチメートル、素文縁、櫛歯文帯、三重の円



第6図 大阪・御旅山
面径 6.8 cm



第5図 大阪・鷹塚山
面径約 7 cm

圈、四乳を配する素文帯、二重の円圈を経て円座鈕にいたる文様構成をもつ。外縁の縁辺にやや肥厚がみられるのが特徴的である(第6図)。

7 和歌山県和歌山市北田井 北田井遺跡⁷⁾

昭和四四(一九六九)年から四五(一九七〇)年にかけて発掘調査された、弥生時代中期から古墳時代前期にかけての集落遺跡である。重圏文鏡は、昭和四五(一九七〇)年に、第三五号住居址内から出土した。住居址は古墳時代前期に属するものといわれている。

重圏文鏡は、面径四・四五センチメートルあって、素文縁、櫛歯文帯、三重の円圈がめぐり円座鈕にいたる。鈕孔には紐跡がつまり、鏡体は火気をあびたように彎曲して銅質も悪いという(第7図)。

8 三重県一志郡嬉野町下之庄 向山古墳⁸⁾

丘陵突端に位置する円墳で、大正三(一九一四)年三月に発掘され、一種の粘土槨と思われる内部主体が発見された。副葬品として内行花文鏡、重圏文鏡、獸帯鏡、石釧、車輪石、筒形石製品などがある。

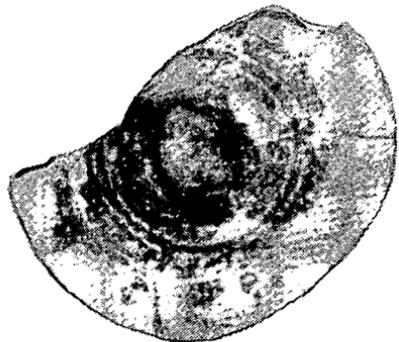
重圏文鏡は、面径六・四センチメートル、素文縁、櫛歯文帯、三重の円圈、斜行櫛歯文帯、二重の円圈を経て鈕にいたる(第8図)。

9 石川県金沢市田中町 田中A遺跡⁹⁾

沖積地にある集落遺跡と推定される。昭和四六(一九七二)年の調査時には、柱穴状ピットや溝状遺構が発見されただけで、住居址と考えられる遺構は検出されなかった。おそらく、集落址の中心部からは離れた地点に相当するからであろう。出土土器が月影式・宮地式土器に限定されているというから、遺跡の年代も四世紀末から五世紀にかけてのものと思われる



第8図 三重・向山
面径 6.4 cm



第7図 和歌山・北田井
面径 4.45 cm

る。

出土した重圏文鏡は、何ら特筆すべき遺構をとまわず、月影式土器を伴出する層から検出されたという。鏡背にうすく朱の付着がみられた。面径六・八センチメートル、外縁のやや肥厚する素文縁、櫛歯文帯、四重の円圏を経て円座鈕にいたる文様構成を示している（第9図）。

10 神奈川県横浜市鶴見区上末吉 梶山遺跡¹⁰

遺跡は台地上にある縄文、弥生、古墳時代にわたる集落址である。重圏文鏡は昭和五〇（一九七五）年、第四次調査の際に発見された。発見されたところは、遺跡の中心部よりもやや東南方に偏した緩傾斜地であるが、周辺には前野町期、五領期に相当する住居址があった。重圏文鏡は単独に出土したものらしく、付近には前野町式土器、五領式土器片が散見されたといわれる。おそらく重圏文鏡の年代を示す土器群であろう。

出土した重圏文鏡は、破損しているものの面径五・六センチメートルあって、やや幅広い素文縁、櫛歯文帯、三重の円圏があつて円鈕にいたる文様構成を示している（第10図）。

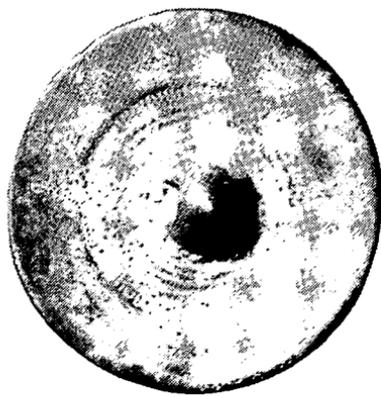
11 茨城県行方郡玉造町沖洲 勅使塚古墳¹¹

昭和三六（一九六一）年に発掘調査された前方後方墳で、全長六四メートルをはかる。後方部中央、古墳の主軸に沿って木棺直葬の内部主体があり、木棺を安置した粘土土床より副葬品が見出された。副葬品には管玉、ガラス小玉と重圏文鏡がある。

重圏文鏡は、面径七・八センチメートルあつて、外縁のやや肥厚する



第10図 神奈川・梶山
面径 5.6 cm



第9図 石川・田中A
面径 6.8 cm

素文縁から櫛歯文帯を経て、四重の円圏がめぐり、鈕に接して突線による鋸歯文がかすかに判別される（第11図）。勅使塚古墳は、東日本地方では初期の古墳と考えられ、とくに関東地方東部、霞ヶ浦地域では初現的古墳であり、いわゆる「地方ウチカタの古墳」として位置づけられるものといえよう。

三、重圏文鏡の系譜と年代

出土遺跡の二相 以上一〇例の重圏文鏡を紹介してきたが、その出土遺跡の年代は、弥生時代後期から古墳時代にかけてのものと理解されるものであった。そして、出土状態をみると、古墳の副葬鏡として検出されたもの、集落址またはその類似の遺跡から出土したものとこの二者が存在している。

古墳の副葬品として検出されたものとして

大分県・亀の甲古墳

福岡県・鬼の首古墳

福岡県・老司古墳

大阪府・御旅山古墳

三重県・向山古墳

茨城県・勅使塚古墳

の六例があり、集落関係遺跡から出土するものとしては

兵庫県・溝平遺跡

大阪府・鷹塚山遺跡

和歌山県・北田井遺跡



第11図 茨城・勅使塚
面径 7.8 cm

の五例があげられて、偶然なことに両者がほぼ相半ばするという結果が出てきた。古墳の副葬品として検出される一群の重圏文鏡は年代的にも、ある一定の幅が劃されるから、さほどの問題がないとしても、集落関係の遺跡から出土するものは、その年代を考定するうえで、やや流動的である。大阪府鷹塚山遺跡例のように弥生時代最終末に比定されるものから、和歌山県北田井例、石川県田中A例、神奈川県梶山例のように、土師式土器の初期にいたるまで、出土状態に一定のきまりのないことが多く、その年代や性格を特定できない状態である。とくに、弥生時代から土師時代の初期にかけての時代は、やがて古墳の成立というきわめて大きい事件がある。重圏文鏡が集落関係遺跡から脱して、古墳の副葬品として採用されるまでの過程は、おそらく、畿内周辺、あるいは西日本・東日本各地での初期古墳の成立と関係があるように思われる。茨城県勅使塚古墳例が示すように、東日本の初期の「地方古墳」の副葬品として重圏文鏡が採用されたのは、畿内勢力とはある程度の距離をおいた勢力の存在を示すものと理解しなければならないだろう。

重圏文鏡の系譜 重圏文鏡という名は、かなり早くから提唱されているもので、富岡謙蔵氏⁽¹²⁾や高橋健自氏⁽¹³⁾も用いて、主として重圏文鏡を二区分して、「重圏素文鏡」と「重圏清白鏡」との両者を挙げている。後藤守一氏も両者の存在を肯定しながら、三重県向山古墳出土鏡なども重圏素文鏡として一群の中にふくめてしまった。しかし、三重県向山古墳出土例を詳細に検討してみると、重圏文間に斜行櫛齒文などをはさんでいるから、本来の重圏文鏡とは区別すべきものであろう。

早くから重圏素文鏡と呼ばれていたものは福岡県糸島郡・三雲遺跡出土鏡や、「巖窟蔵鏡」⁽¹⁵⁾所収のもの⁽¹⁶⁾のものを指しており、やや幅広の円鏡を二重あるいは三重にめぐらせ、内区の主文様とした類のものであった。そして、それらはいずれも中国戦国時代末葉から前漢代にかけて製作されたものと考えられているから、日本の重圏文鏡とは年代的にも、鏡背文鏡からも同列にとり扱うことはできない。

わが国の重圏文鏡が、その母型としたものは重圏素文鏡でもなく、また重圏清白鏡の類でもない。おそらくは前漢

代に製作されたであろう「日光鏡」や「明光鏡」の類、あるいは「四蛇鏡」と呼ばれるような類のものではなかったかと推定する。その点では、朝鮮半島や日本の北部九州地方にみられる「小銅鏡」とは同様の母型をもつものと理解されるが、一連の「小銅鏡」の中に重圏文鏡をふくめられるかどうか疑問であろう。とくに、分布の地域をことにしている点や、弥生時代に属する例がきわめて乏しいことを考えると、「小銅鏡」の延長線上にあるとはいえず、全く同一視できないものが潜んでいるように思える。

大阪府鷹塚山例、兵庫県溝平例、石川県田中A例、和歌山県北田中例をあげて、瀬川芳則氏は

「今のところ、その初現とみられる小型仿製重圏文鏡は、大阪湾沿岸とその付近に分布の中心があり——中略——西の地方からの影響を強く受けながらも、この独自の文様を飾る重圏文鏡は、淀川水系もしくは大阪湾沿岸付近のどこかにその製作地があったのではないか」と考え「この小型仿製鏡を、仮に大阪湾小型仿製鏡と呼んで」いる。¹⁸⁾

たしかに、北部九州地方のいわゆる「小銅鏡」の年代は、弥生時代中期後葉から後期前半にかけてのものと考えられるから、畿内地方とその周辺の重圏文鏡との間に年代的差異がある。そして、北部九州地方では墳墓の副葬品として用いられ、畿内およびその周辺地方では、集落関係の遺跡の中にとどまっている。瀬川氏の指摘するように、製作地の交代もふくめて、ここに一つの断絶をみなければならぬだろう。

いま一つの断絶は、古墳副葬鏡としての重圏文鏡との間にある断絶である。古墳の副葬品となっているものは、古墳の築造年代が四世紀末から五世紀にかけてのものが多く、倣製三角縁神獸鏡と同時期か、あるいは若干後出のものと考えられる。畿内地方以外の地域で、古墳が成立する段階の年代と、ほぼ一致しているのは、古墳副葬鏡がもつ地域の特性なのであろうか。弥生時代以来の銅鏡は、ついには古墳の副葬品とはなりえず、あらたに古墳への副葬鏡が作り出されたのであろうか。重圏文鏡の二つの様相は、この間の事情を具体的に表現しているように思える。

小銅鏡と重圏文鏡 重圏文鏡を、弥生時代の小銅鏡との関係からとらえてみると、まず、その母型を日光鏡・明光鏡・四蛇鏡に求める点で共通するものがある。同一祖形をもつ倣製鏡が時期を異にして日本に分布する現象をどのように理解したらよいのだろうか。

小銅鏡群と重圏文鏡との間の製作技術的な関係が徹底的に追求されていない現在では、危険な推論を避けるべきか

もしれない。しかし、重圏文鏡の一群には、当然、小銅鏡の影響が強いと考えなければならぬだろう。たとえば、重圏文鏡と時期をほぼ同じくする石川県次場遺跡出土鏡⁽¹⁹⁾、島根県小谷遺跡出土鏡⁽²⁰⁾、東京都宇津木向原遺跡出土鏡、群馬県下佐野遺跡出土鏡⁽²²⁾などの鏡群は、宇津木向原遺跡出土鏡の素文鏡をのぞいて内行花文鏡であり、それらが小銅鏡との関連を強くのこしているといわれる。そして、重圏文鏡を別として、一群の小銅鏡系列と考えられるものは、畿内地方にその出土例がほとんどないのである。同時に、島根県小谷例、東京都宇津木向原例、群馬県下佐野例がいずれも墳墓遺跡の出土例であることも暗示に富んでいる。この現象は、兵庫県溝平例、大阪府鷹塚山例、和歌山県北田井例などのように、集落関係遺跡内にとどまった重圏文鏡との差異を物語るもので、古墳成立前後の二様相として捉えてみた。

小銅鏡群が、古墳の副葬品となっている例はいまのところ明確にみとめられないから、小銅鏡が古墳成立以後まで残存したとは考え難い。そして、その系列をひくものに重圏文鏡、小形内行花文鏡をあててみることにしたい。古墳時代の倣製鏡の出現は、おそらく、重圏文鏡、小形内行花文鏡が底流であっただろうし、三角縁神獸鏡やその他の大形倣製鏡は、おそらくそれらとは別系統の、新しい技術的な内容をもって登場してくるものではないだろうか。

四、重圏文鏡と珠文鏡

重圏文鏡は、出土例のきわめて少ない鏡種であるが、古墳時代倣製鏡として初現的なものであり、重要な意味をもっていた。重圏文鏡が小形の内行花文鏡などとともに、弥生時代からの「小銅鏡」の系列の中にあるらしいことも述べた。そして重圏文鏡が古墳時代の中で、どのように変化していくかをとらへることは、古墳時代での鏡作り、ひいては当時の鏡作りの掌握権ともかかわりをもつことになって、古墳時代社会機構を追求する上に重要であると考えている。

重圏文鏡の主たる鏡背文様は、いうまでもなく重圏であるが、この重圏文をのこして鏡背文様とし、重圏の間に何らかの文様を付加させた鏡群がある。重圏文鏡に最も近い文様表出をしているもので珠文鏡と呼ばれているものの一部分を挙げることができる。

珠文鏡には大別して二種類のものがあり、その一は、重圏文鏡に近い文様構成をとるもの、すなわち、重圏文の間に一列の珠文帯を配するもので、これを珠文鏡A類と呼んでおこう。いま一つは、内区の主文様として珠文を一面に表出したものであり、これをいま珠文鏡B類と呼んでおこう。この二種類の珠文鏡の間にも有機的な連繋がみとめられようが、珠文表出の方法に差異があり、かつ古墳出土例をみると、珠文鏡A類がより古い時期に集中的にみられるようであって、両者の性格の相違をも表わしているのではないだろうか。

いま、珠文鏡A類の主な出土例をあげてみると

熊本県熊本市清水町津浦 竹ノ上古墳⁽²³⁾

面径八・一センチメートル。素文縁、外向鋸歯文帯、櫛歯文帯を経て

珠文帯がある。

佐賀県佐賀市久保泉町川久保 関行丸古墳第二主体⁽²⁴⁾

面径七・三センチメートル。やや肥厚する外縁、素文縁、櫛歯文帯、

突線帯をへだてて珠文帯がある(第12図)。

広島県三次市四拾貫小原 四拾貫小原一号墳A主体⁽²⁵⁾

面径六・八センチメートル。素文縁、無文帯を経て珠文帯にいたる。

珠文帯は各一条の円圏によって囲まれている。

岡山県邑久郡邑久町 忠明古墳⁽²⁶⁾

面径六・八センチメートル。素文縁、櫛歯文帯、三重の円圏の間に二

列の珠文帯がみとめられる。

岡山県小田郡矢掛町江良奥山 長谷古墳⁽²⁷⁾

面径八・〇センチメートル。肥厚する外縁をもつ素文縁、外向鋸歯文帯、素文帯、外向鋸歯文帯、櫛歯文帯を経て

珠文帯がある。

鳥取県東伯郡東郷松崎町国信 国信神社古墳⁽²⁸⁾



第12図 佐賀・関行丸
面径 7.3 cm

面径七・三センチメートル。素文縁、楯歯文帯、素文帯、二重の円圈を経て珠文帯をおき、さらに一重円圈をめぐらせて鈕にいたる。

徳島県鳴門市檜 谷口山上古墳⁽²⁹⁾

一部分破損しているが面径七・四センチメートル。外縁のやや肥厚する素文縁、外向鋸歯文帯、楯歯文帯、波文帯を経て珠文帯、円鈕にいたる。

兵庫県小野市敷地字宮林 大塚古墳⁽³⁰⁾

二面の出土をみるがいずれも破損していて面径が不明である。一は素文縁、粗い外向鋸歯文帯、楯歯文帯、二重の円圈があつて珠文帯があるが、珠文帯は鈕に接する鈕座の部分に付されている。二は、素文縁、楯歯文帯、二重の円圈があつて珠文帯にいたる。円鈕座。

兵庫県佐用郡佐用町円応寺 円応寺二号墳⁽³¹⁾

面径六・一センチメートル。素文縁、やや幅広い楯歯文帯、二重の円圈がめぐり珠文帯がある。整美な珠文鏡である。

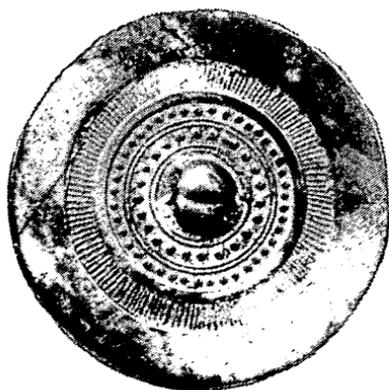
大阪府羽曳野市壺井 御旅山古墳⁽³²⁾

面径六・七センチメートル。外縁のやや肥厚する素文縁、粗い外向鋸歯文帯、楯歯文帯を経て珠文帯がある（第13図）。

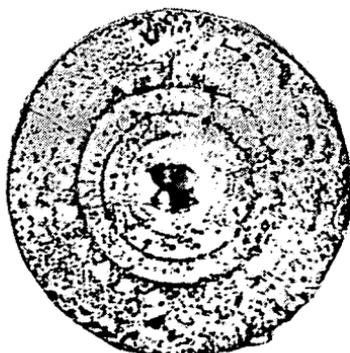
岐阜県岐阜市長良字平瀬 龍門寺一四号墳⁽³³⁾

面径五・三センチメートル。外縁のやや肥厚する素文縁、楯歯文帯、二重の円圈を経て珠文帯があり、さらに一重の円圈をおいて鈕にいたる。

岐阜県加茂郡坂祝村黒岩 前出古墳⁽³⁴⁾



第14図 岐阜・前出
面径 7.9 cm



第13図 大阪・御旅山
面径 6.7 cm

二面の出土がみられる。一は面径七・三センチメートル。やや肥厚する外縁の素文縁、外向鋸歯文帯、櫛歯文帯、二重の円圏、珠文帯にいたり円鈕座をもつ。二は面径七・九センチメートル。素文縁、櫛歯文帯、突帯をへだてて珠文帯、さらに二重の円圏をへだてて内側の珠文帯、さらに二重円圏を経て鈕にいたる。珠文帯を二重にかさねている(第14図)。

石川県能美郡寺井町和田山 和田山五号墳B号棺⁽³⁵⁾

二面あってともに珠文鏡類らしい。同様な文様構成をとると聞く。一は面径七・八センチメートル。二は面径八・〇センチメートル。

長野県長野市篠の井町石川 川柳将軍塚古墳⁽³⁶⁾

三面の出土鏡が伝えられている。一は面径四・八センチメートル。素文縁、外向鋸歯文帯、突線をへだてて珠文帯がある。二は面径五・一センチメートル。肥厚する外縁の素文縁、粗い外向鋸歯文帯、櫛歯文帯を経て内区の珠文帯がある。三は面径五・一センチメートル。素文縁、外向鋸歯文帯、櫛歯文帯を経て珠文帯がある。

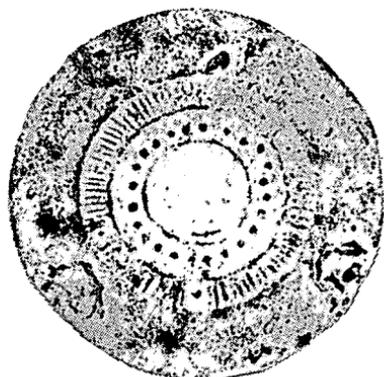
長野県小県郡丸子町依田 岩窟古墳⁽³⁷⁾

面径八・三五センチメートルあって、珠文鏡A類としては大形の部に属する。素文縁、櫛歯文帯、素文帯、外向鋸歯文帯を経て珠文帯がある。

山梨県甲府市桜井町 桜井一号墳⁽³⁸⁾

面径七・五五センチメートル。肥厚する外縁をもつ素文縁、外向鋸歯文帯、素文帯、二重円圏、珠文帯を経て一重円圏、鈕にいたる文様構成をとる(第15図)。

千葉県市原市菊間字北野 新皇塚古墳南槨⁽³⁹⁾



第16図 千葉・新皇塚
面径 7.3 cm



第15図 山梨・桜井1号
面径 7.55 cm

面径七・三センチメートル。広い素文縁、櫛歯文帯、珠文帯を経て鈕にいたる（第16図）。

福島県伊達郡保原町 土橋古墳⁽⁴⁰⁾

面径七・三センチメートル。半三角縁に近い素文縁、外向鋸歯文帯、櫛歯文帯、珠文帯、二重円圈を経て鈕にいたる。

福島県いわき市平沼内字中田 中田横穴墓⁽⁴¹⁾

面径六・四センチメートル。幅広い素文縁、内向鋸歯文帯、珠文帯を経て円座鈕にいたる。面反りがやや大きい。などがあげられよう。

これらはいずれも面径五〜八・五センチメートルの間にあり、いわゆる小形鏡であって、重圈文を基本として珠文帯を円圈の間に入れるものである。そして、珠文帯が重ねられるものなどもみられる。また、大阪府御旅山古墳では、四乳のある重圈文鏡と伴出しているから、この点で珠文鏡との接点が求められるかもしれない。

五、珠文鏡A類の年代について

珠文鏡A類とした鏡群を出土する古墳の年代について検討してみると、およそ次のようになるであろう。すなわち、

熊本県竹ノ上古墳は、内部主体が箱式石棺であったというのみで詳細は不明。古墳の年代を探る決め手にとほしい。

佐賀県関行丸古墳は、全長六〇メートルばかりの前方後円墳で横穴式石室をもち、石室内部に三個所の屍床がある。珠文鏡A類は第二屍床、すなわち横穴式石室の奥壁に接して設けられた屍床からの出土で、金銅製冠帽、貝輪、鹿角柄刀子、鹿角柄工具などがあって五世紀後半ごろの年代が与えられよう。

四拾貫小原一号墳は、直径二六メートルほどの円墳で、木棺直葬の内部主体をもち、他に二基の粘土槨をもっている。木棺直葬のA主体は鉄斧、鋤先、土師式土器高杯などを伴出しており、珠文鏡A類がある。土師式土器の年代からみると五世紀代後半ごろのものといわれる。

岡山県忠明古墳は伴出品が不明であり、かつ古墳の内容が不詳である。長谷古墳についても、古墳が山頂にあったということと、内部主体が箱式石棺であり、鉄器が伴出したという以外に、年代を決める手がかりがない。

鳥取県国信神社古墳も、勾玉伴出と伝えるほかはすべてが不明である。

徳島県谷口山上古墳は、大正年間の発掘で古墳の詳細は不明、わずかに勾玉、管玉、白玉、刀の柄頭、琴柱形石製品が遺存している。おそらく五世紀代中葉前後の古墳と考えられよう。

兵庫県大塚古墳は、直径四七メートルの円墳で葺石、埴輪をめぐらせ、内部主体は礫床をもつ粘土礫といわれており、副葬品として管玉、ガラス玉のほかに四神鏡二面、変形神獸鏡、変形獸帯鏡などの伴出品が知られている。五世紀代前半の古墳と考えてよい。

兵庫県円応寺二号墳は、円墳で竪穴式石室をもつ。管玉などの伴出が伝えられているが、他は不詳である。竪穴式石室の細部の構造についても詳らかでないが、五世紀前半の年代が考えられよう。

大阪府御旅山古墳は、前章で詳述したごとく、三角縁神獸鏡、小形内行花文鏡との伴出関係があり、墳丘における埴輪壺などの存在からみて四世紀末から五世紀初頭ごろの年代を与えてよいと思われる。

岐阜県龍門寺一四号古墳は、円墳で礫床をもつ木棺を内部主体としており、龍門寺一号墳に後出する五世紀前半のものと考えられる。

岐阜県前出古墳は、変形四獸文鏡二面のほか珠文鏡二面の伴出例で、内部主体は不明ながら五世紀前半の古墳の様相を示している。

石川県和田山五号墳は、前方後円墳に二基の粘土礫があり、A礫からは変形神獸鏡のほか眉庇付冑、短甲などを出し、B礫から珠文鏡二面と短甲、刀劍、槍、刀子、鏃、鋤先、斧などを出しており、A・B礫とも五世紀代前半のものと考えられている。

長野県川柳將軍塚古墳は、全長九〇メートルばかりの前方後円墳で、後円部に竪穴式石室をもち、銅鏃、筒形銅器、車輪石などとともに方格規矩鏡、内行花文鏡などの鏡群が副葬品として知られている。古く発掘されたものなので一括遺物が判明しないが、三面の珠文鏡が伴出したといわれている。四世紀末から五世紀初頭にかけての古墳とみ

るむきが一般的である。

長野県岩窟古墳は、報告によれば横穴墓のように思われる。珠文鏡のほか伴出遺物として刀、鏃、紡錘車、土師器、須恵器が出土したという。六世紀代のものと考えられるが、福島県中田横穴墓にも珠文鏡A類の出土がみられるから、何か共通する性格があるのかもしれない。

山梨県桜井一号墳は、積石による円墳であるといわれ、竪穴式石室を内部主体とする古墳で、勾玉の伴出が知られるのみで他の副葬品は不明である。五世紀代前半の古墳と考えてよいだろう。

千葉県新皇塚古墳は、全長八〇メートル以上の規模をもつ前方後方墳で、後方に二重の粘土槨が発見された。北槨には内行花文鏡、石劍、勾玉、管玉、劍、刀子、鉄鏃、やりがんな、鎌、斧、鋤先などがあり、南槨からは刀、劍、刀子、やりがんな、鎌、斧、のみ、管玉と珠文鏡が伴出している。墳裾から出土した土師式土器からみると、四世紀末から五世紀初頭にかけての古墳とみてよいだろう。

福島県土橋古墳も、古墳の詳細は不明で、わずかに金環や須恵器などが遺存しているという。おそらく六世紀代のもので考えられよう。

福島県中田横穴墓は、裝飾壁画のある横穴墓として著名である。金銅製品、銅釧、刀、劍、鉾、馬具、土師器、須恵器や玉類の出土が報ぜられていて、六世紀代の横穴墓としてよいと思われる。

以上のように、珠文鏡A類としたものは、上限を四世紀末葉にまで遡らせることができる。とくに、その上限を劃する古墳の中には、いわゆる「地方の古墳」の初期のものとも一致する年代を示している。このことは、重圏文鏡や小形の内行花文鏡のような一群のものとの共存関係を示していることであり、古墳時代初期の倣製鏡に重要な示唆を与えていることになろう。

重圏文鏡や珠文鏡A類が、大阪府御旅山古墳例を除けば、畿内地方にみられずに、その周辺地域から、九州・関東地方にまで分布を示しているから、畿内地方を中心とする三角縁神獸鏡や、大形の倣製鏡の製作とも、ことなつた様相を示すものと理解しなければならぬだろう。

古墳時代の小形の倣製鏡として、方格規矩文鏡、四獸文鏡、獸帶鏡などの鏡種が知られているが、それらはいずれ

も、その母型としての中国鏡の存在があつて、それを無視することができない。しかし、重圈文鏡、珠文鏡A類は、とくに中国鏡の中にその母型を見出しえないし、また、その母型を特定できない鏡種である。この点で、畿内地方に集中的にみられる方格規矩文鏡などの鏡種とは、全く別系列のものと考えざるをえないし、古墳時代における初期做製鏡の二大源流を考慮する必要性を痛感するのである。

注

- (1) 日名十軸軒「大分市三芳の古墳発見」考古学雑誌一一九 明治四四(一九二一)年
後藤守一『漢式鏡』大正一五(一九二六)年
後藤守一『古鏡聚英』昭和一七(一九四二)年 図版八〇—一七
- (2) 富岡謙蔵『古鏡の研究』大正九(一九二〇)年 図版九—一二
後藤守一『漢式鏡』大正一五(一九二六)年
- (3) 森員次郎・岡崎敬・小田富士雄・下条信行・亀井明德・佐田茂『福岡市老司古墳調査概報一九六六—一九六九』福岡市教育委員会 昭和四四(一九六九)年
- (4) 村川行弘「兵庫県尼崎市溝平遺跡」日本考古学年報一〇 昭和三二年度
尼崎市教育委員会編『溝平遺跡調査の概要』昭和三一(一九五七)年
- (5) 瀬川芳則・江谷寛『鷹塚山弥生遺跡概要報告』昭和四三(一九六八)年
瀬川芳則「弥生文化と農耕」大阪府史第一巻 昭和五三(一九七八)年
- (6) 田代克己「羽曳野市壺井御旅山前方後円墳発掘調査概報」大阪府教育委員会 昭和四三(一九六八)年
大阪府教育委員会編『南河内石川流域における古墳の調査』大阪府文化財調査報告 第二二輯 昭和四五(一九七〇)年
- (7) 藤丸詔八郎・笠井保夫「和歌山市北田井遺跡発掘調査概報Ⅱ」和歌山市教育委員会 昭和四六(一九七二)年
- (8) 後藤守一「伊勢一志郡農地村の二古式墳」考古学雑誌一四—三 大正一二(一九二三)年
橋本登夫・高瀬澄『金沢市田中A・B遺跡』北陸自動車道路・金沢バイパス関保埋蔵文化財調査概報 石川県教育委員会 昭和四六(一九七二)年
- (10) 神沢新一「棍山遺跡(4)」神奈川県立博物館発掘調査報告書 第一〇号 昭和五二(一九七七)年

- (11) 大塚初重 小林三郎「茨城県勅使塚古墳の研究」 考古学集刊二一三 昭和三九(一九六四)年
- (12) 富岡謙蔵「九州北部に於ける銅剣・銅鍔及び弥生式土器と伴出する古鏡の年代について」 考古学雑誌八一九 大正七(一九一八)年
- (13) 高橋健自「銅鍔銅剣考」 考古学雑誌一三一四 大正一一(一九二二)年
- (14) 後藤守一「漢式鏡」 七七―七九頁(前出)
- (15) 青柳種信「柳園古器略考」 文政六(一八二三)年
- (16) 梁上椿「巖窟蔵鏡」 一九四〇年
- (17) 杉原荘介「日本青銅器の研究」 昭和四七(一九七二)年
高倉洋彰「弥生時代小形仿製鏡について」 考古学雑誌五八一三 昭和四七(一九七二)年
- (18) 瀬川芳則「弥生文化と農耕」 大阪府史 四四四頁(前出)
- (19) 橋本澄夫「石川県羽咋市次場・吉崎遺跡」 日本考古学年報一六 昭和三八年年度
- (20) 内田戈・東森市良・近藤正「島根県安来平野に於ける土墳墓」 上代文化 第三六輯 昭和四一(一九六六)年
- (21) 大場磐雄ほか「宇津木遺跡とその周辺」 中央高速道八王子地区遺跡調査団 昭和四八(一九七三)年
- (22) 群馬県教育委員会・長谷部達雄・平野進一氏の教示による
- (23) 熊本市立博物館所蔵品
- (24) 渡辺正氣「佐賀市関行丸古墳」 佐賀県文化財調査報告 第七輯 昭和三三(一九五八)年
- (25) 四拾貫小原調査団編「四拾貫小原」 昭和四四(一九六九)年
- (26) 『京都大学文学部博物館考古学資料目録(2)』 昭和四三(一九六八)年
- (27) 『岡山の原始・古代展』 目録所収 昭和四九(一九七四)年
- (28) 後藤守一「漢式鏡」 第一九六図(前出)
- (29) 富岡謙蔵「古鏡の研究」 図版九一―一一(前出)
- (29) 後藤守一「漢式鏡」 第五二五図(前出)
- (30) 鎌谷木三次「播磨出土漢式鏡の研究」 昭和四八(一九七三)年
- (31) 鎌谷木三次「播磨出土漢式鏡の研究」(前出)

- (32) 田代克己『羽曳野市壺井御旅山前方後円墳発掘調査概報』(前出)
- 大阪府教育委員会編『南河内石川流域における古墳の調査』(前出)
- (33) 榑崎彰一『岐阜市長良竜門寺古墳群』名古屋大学文学研究論集 昭和四〇(一九六五)年
- (34) 後藤守一『漢式鏡』第三九〇図(前出)
- 後藤守一『古鏡聚英』図版八〇—一五(前出)
- (35) 石川考古学研究会『能美古墳群調査概要』昭和四三(一九六八)年および橋本澄夫氏のご教示による。
- (36) 森本六爾『川柳村將軍塚古墳の研究』昭和四(一九二九)年
- (37) 小山真夫『信濃國小泉郡の岩窟古墳』考古学雑誌二二—二 昭和七(一九三二)年
- (38) 甲斐古墳調査会編『甲斐の古墳』昭和四九(一九七四)年
- (39) 齋木勝・種田斎吾『新皇塚古墳』市原市菊間遺跡 所収 昭和五〇(一九七五)年
- (40) 『福島県史』6 考古資料編所収 図版五四— 昭和三九(一九六四)年
- (41) いわき市史編さん委員会編『中田裝飾横穴』いわき市史別巻 昭和四六(一九七一)年